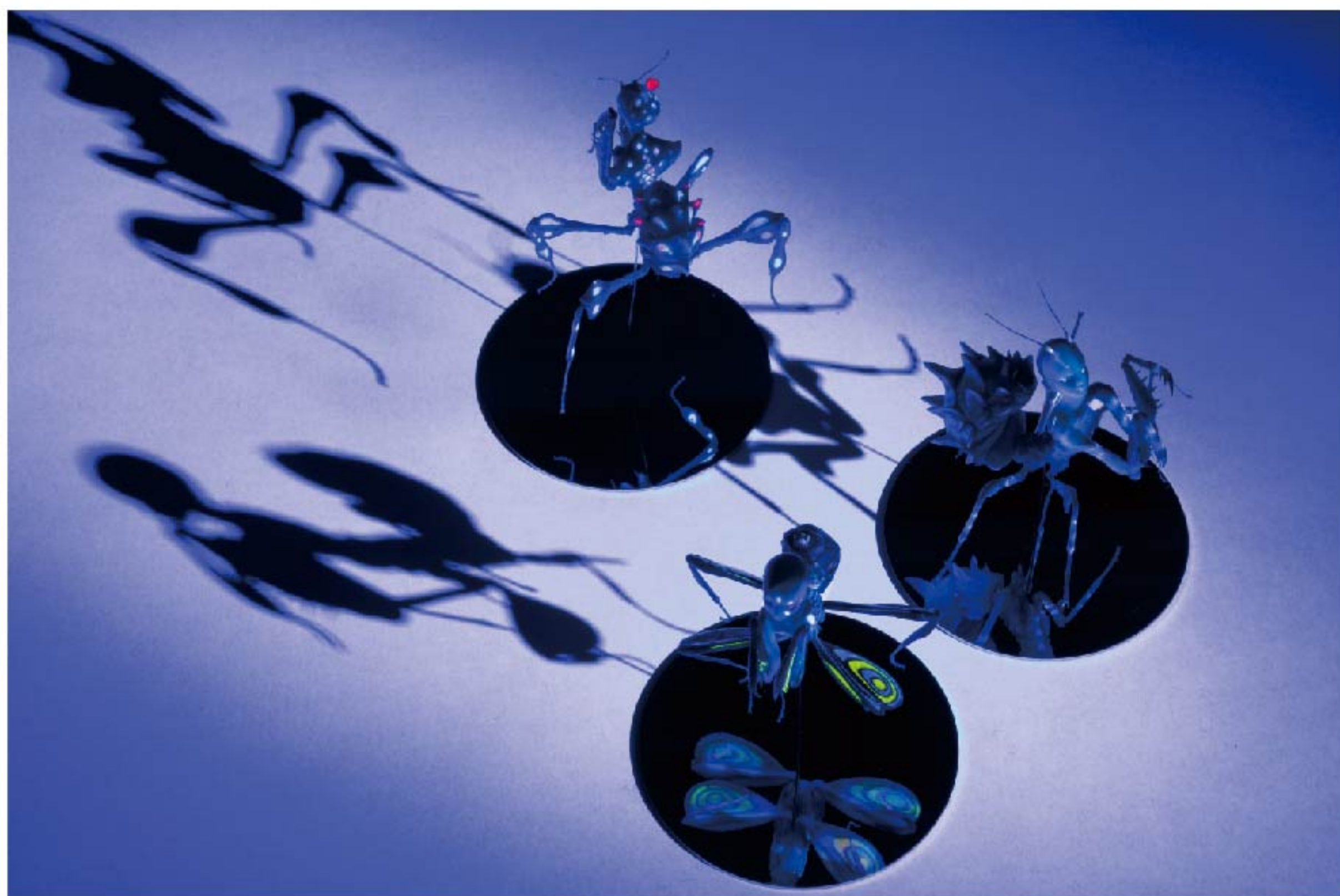


余 詩穎  
YU SHIYING



## NYMPH

光造形レジン、化粧品、蛍光塗料



## NYMPH

人のかたちの一部分を有するものを見ると、人は自然と自分との繋がりを感じてしまう。人のかたちというのはそれほどまでに強いイメージをもつものだ。古くから人形とは、自身を映し出す鏡のようなものとして人の意識の中に存在してきた。とくに、可動性のある人形は、おもちゃとして弄られながら、相手を映しだすこともある。

認識学研究者の金森修氏は、著書『人形論』に、認識学の視点から「人間未満の存在」について研究し、「人間圏」の境界設定という概念に言及した。そこには、人間以下が「亜人」、人間以上が「超人」と呼ばれているとある。人形は「人間未満の存在」として、人間自身とどんな関係性をもつのだろうか。現代では、ペットを家族として接したり、ヴァーチャルな人物と恋愛したり、結婚したりしている人がいる。学習でき、思考できるシステム「AI」はいつか人類に代わる恐れもある。そうになると、「人間」と呼ばれるものの範囲はどこからどこまでなのか。

したがって、私はこの半人半蟲の「NYMPH」を創り出すことを通して、自分の人間としての存在感を改めて認識した。